

## 自伝への拒否

巴金『家』、「楊嫂―自伝之一」、『巴金自伝』を手がかりに

近藤光雄

はじめに

中国現代文学が多様化していく一九三〇年代、自伝が新たなジャンルとして注目された。政界、文壇で活躍した人々の自伝が連載、出版され始め、徐々にブームを迎える。こうしたなか、作家巴金（一九〇四―二〇〇五）は一九三一年、自伝的小説と評される『家』を『時報』に発表し、連載中の同年一月、「楊嫂―自伝之一」（以下、「楊嫂」）を執筆した。また、一九三三年には回想録を数篇書き下ろし、一九三四年一月、『巴金自伝』として刊行した。巴金は自伝ブームのなかで逸早く自伝

を発表したことになるが、実際のところ彼の自伝は、一九三〇年代の中国の自伝における一般的な執筆の目的、自伝テクストの特徴を拒否するスタンスを突出させるものであった。巴金は何ゆえに、同時代の自伝を拒否し、それとは異なる性格のものを書いたのだろうか。

本稿では、発表当初から自伝と関わりのある『家』、「楊嫂」、『巴金自伝』を分析し、同時代の自伝を拒否する巴金のスタンスを辿りながら、自伝を拒否することの意味を考察する。

## 一 一九三〇年代の中国の自伝

まずは自伝の一般的な定義について一瞥しておく。

フィリップ・ルジュンヌがすでに定義したように、自伝とは、「誰かが自分自身の生涯を散文で回顧的に語った物語」であり、且つ「その物語が個人の生活、とりわけ人格の歴史を主として強調する」ものでなければならぬという<sup>1)</sup>。換言すれば、作者は自伝を執筆する際、記憶を辿りながら自身の生い立ちや実体験を書き綴っていくのだが、作者はただ単に自身の体験を、取捨選択もせずに時系列に書き連ねるわけではない。むしろ意識的に、それまで積み重ねてきた人生経験を系統立て、一つの「物語」として構築し、そのストーリーを描きだすことで、自己形成の過程を跡づけようとするのである。あらゆる人生経験のなかから一こまだけ切り取り、自伝として発表するケースも少なくないが、その場合にも、個々人のアイデンティティ形成に対して決定的な意味を持つ出来事が記述されることが多い。自伝とは、作者の自己形成の過程を読者に示す場と言えよう。

自伝の成立を左右する一要素として、作者における読者意識を無視することはできない。作者の生い立ちや実体験が文字化され、いづれ読者の眼に触れる以上、作者は、テキストに注がれる他者の眼差しを意識しながら、自伝を執筆することになる。

ここで言う他者の眼差しとは、自己形成への関心、自己と世界との関わり方についての解釈といった読者の期待<sup>2)</sup>を指す。読者の期待を予想して、それに関わっていかうとするスタンスこそ、作者における読者意識なのである。このような意識と、自己形成の過程を「物語」化する作者のスタンスとが相俟って、自伝における「物語」としての性格、自己形成の過程がより明確に描き出される。その意味では自伝は、作者における読者意識に支えられながら、自己形成の過程を示したテキストと言ってもよい。

さて、中国で自伝ブームが起こった一九三〇年代とは、一九一一年の辛亥革命から二十年、一九一九年の五四新文化運動から十年経過した時期である。歴史の二つの転換点は、革命に参加し、国家建設や社会改革に携わった革命家、政治家を輩出する一方で、五四以降の思想や文学を方向づけた思想家、作家をも育て上げた。各分野における開拓者として活躍した彼らは、当時すでに名声を博し一定の知名度を上げており、自伝を書くだけの人生経験を積み上げていた。一九三〇年代の自伝ブームは、ほかならぬ彼らの間で起こったものであったが、当時、そのような経歴の持ち主にだけ自伝執筆の資格が与えられ、社会的な自己を書くことが要請されたのは言うまでもない<sup>3)</sup>。それだけに彼らは、自伝を通して、人格や思想の形成、政治的な立

場や社会的な地位の確立、近代的な自我の確立といった自己形成の過程を、歴史の動向と結びつけ、社会との接点を見出し、自身のアイデンティティを再確認するかたちで、読者に示したのである。そればかりでなく、彼らは、革命後もなお残存する封建社会に生きる読者が、自伝から教訓を汲み取り、経験を学び取り、読者自身の成長につなげていくことをも期待した。このことは、読者の存在のみならず、自伝作者自身をも、自伝の読まれた時代の社会、歴史と緊密に結びつけることを意味したのである。一九三〇年代の中国の自伝は、読者に対しては啓蒙を図る装置であり、作者にとっては自己形成の過程の持つ今日的な社会的意義を再確認する材料であった。そのような役割を兼ね備えた例に、謝冰瑩の自伝『一個女兵的自伝』<sup>1)</sup>が挙げられる。

一九〇六年に生まれた謝冰瑩は、刺繡を嫌がり、纏足を勝手に解き、両親に頼み込んで学校に行かせてもらうなど、幼少期から反抗的な性格であった。二十歳を迎えた一九二六年、彼女は両親の取り決めた結婚を解消しようと家を飛び出し、武漢中央政治軍事学校に入学し、翌年、北伐に従軍した。従軍するなかで、彼女は軍人としての社会的な責任を意識し始める。北伐が失敗に終わり実家に戻ると、謝冰瑩は両親から結婚をせがまれ、そこで再び封建的な家庭を飛び出すのであった。

『一個女兵的自伝』は、封建的な家庭に生まれ育った少女が、婚約解消をきっかけに北伐に従軍し、軍人という社会的な存在へと成長していく過程を描いたものである。謝冰瑩は、軍人としての自身の存在を北伐当時の社会状況、歴史と結びつけて捉えることによって、自己のアイデンティティを見出したのである。社会、歴史と一体化した自己の姿を、自伝執筆によって再確認し、読者に示したのである。そればかりでなく、彼女は婚約解消という個人的な体験をそのまま、五四新文化運動の掲げる女性の解放という社会的な課題へと発展させ、近代的な自我を確立していく女性像、すなわち社会的な自己を浮き彫りにしたのである。このため、『一個女兵的自伝』はたちまち読者の間で話題となり、「彼女のやり方を真似て家を飛び出そうとした娘も数多く」現れ、「青年たちを鼓舞し、抗日戦争に立ち上がらせ」たという<sup>2)</sup>。

謝冰瑩の自伝が読者に対して啓蒙を図る装置として機能し得たのは、彼女の経験が一九三〇年代においても社会的意義を持っていたからにほかならない。『一個女兵的自伝』は、作者自身を自伝の読まれた時代の社会、歴史と緊密に結びつけたのである。

## 二 自伝的小説としての『家』

読者に対する啓蒙というテーマは、五四新文化運動以降の中国現代文学に広く共有されたものである。作家巴金は、長篇小説『家』において初めてこれを実践した。アナーキストとしての経歴を持つ巴金は、処女作『滅亡』（一九二八年）をはじめとするそれまでの短篇、中篇小説において、無政府社会の実現を目指した「社会革命」や、それに関わるなかで知識人の直面する問題を取り上げる傾向があった。しかし『家』においては作風が一変し、封建主義、家族制度に批判の矛先を向けたのである。

『家』は、革命の時代に没落の一途を辿る大家族を背景に、知識青年が封建的な旧勢力に反抗する姿を描いた小説である。「高家」の家長である高老太爺は、封建的な風習や家族制度に固執する人間で、孫たちの若い世代の職業、婚姻などを気の向くままに決めていた。その最初の犠牲者が孫の覚新である。一族の長男を父親に持つ覚新は、長子だったためやむなく留学を諦め、封建家族の跡継ぎとしての運命を余儀なくされる。愛する女性との婚姻も、母親同士の衝突により実現せず、新たな結婚相手も高老太爺がおみくじの方法で決めた人であった。弟の覚民は、五四新文化運動の薫陶を受け、自由恋愛を唱え、意中

の従妹と結ばれようとするが、高老太爺が自らの意向でほかの女性を結婚相手に選んでしまう。覚民は弟の覚慧に励まされながら、婚約が解消されるまで反抗し続けた。覚慧は、『家』の主人公であり、封建的な旧勢力への反抗を貫いた若い世代の代表人物である。彼は、学生運動に参加し、進歩的な思想を伝える雑誌を発行するなど、積極的に社会改革に携わった。そして高老太爺の言いつけを守り、優柔不断で折衷主義の長兄覚新に対して、常に批判的であった。彼はまた自由恋愛を唱え、小間使いの少女の鳴鳳に好意を寄せていた。しかしある日、高老太爺の意向で、「孔教会」会長の馮樂山が鳴鳳を妾に貰い受けることになった。これを知った鳴鳳は入水自殺をするが、覚慧はこれを受けて、彼女を死に追いやった封建制度への反抗をいっそう強めた。若い世代を次々と死に追いやる封建的な風習や家族制度に耐え兼ねた覚慧は、ついに家を飛び出し、新しい環境で社会改革のために奮闘を始めたのである。

かくして巴金は、五四新文化運動の薫陶を受けた覚慧が、封建的な旧勢力に反抗し、社会活動に携わるなか、いよいよ進歩的な知識青年へと成長していく過程を描いた。巴金は、覚慧が社会的な自己を形成し、近代的な自我を確立していく過程を辿ることで、五四新文化運動における啓蒙言説を主題化し、読者に対して啓蒙を図ったのだが、このような意識は、『家』の連

載開始当初から表れていた。<sup>7)</sup>

一方の読者は『家』をどう捉えていたのだろうか。余哲剛は「『家』なる一文のなかで、「覚慧は（……）四面楚歌の大家族のなかで、終始屈服することなく、あらゆる困難を切り抜け、社会に歩み出た。彼は、巴金そして読者にとって模範的な人物である」と述べた。頑石は、「読了巴金的『家』後」のなかで、「全篇の内容、構成、ならびに作者の思想は、大きな成功を収めている」、「物語は至る所で、はっきりと私たちの奮闘の精神を促している」と述べた。評論家の巴人は、「略論巴金的『家』三部曲」のなかで、次のように述べている。

（……）中国社会が立ち遅れているため、多くの青年は家庭生活しか送ったことがなく、社会生活が不十分である。巴金は彼らを、その慣れ親しんだ生活から引き摺り出し、もっと新しい、もっと広い世界に投げ入れた。このことは、抗日戦争の隊列にいる多くの勇敢な青年が、巴金の小説、とりわけ『家』に啓発された事実からも、証明できる。（……）<sup>10)</sup>

覚慧における近代的な自我の確立を描いた「物語」が、読者における自己形成の道標として積極的に読まれ、受け入れられたことは明らかである。『家』は、読者の存在を、小説の読ま

れた時代の社会、歴史と緊密に結びつけた小説と言えよう。

読者に対する啓蒙という社会的な役割を意図して書かれたテクスト、という意味において、『家』は確かに、謝冰瑩の『一個女兵的自伝』をはじめとする一九三〇年代の中国の自伝と同じテーマを共有していたし、読者に対する啓蒙においても、一定の現実的な成果を上げていた。しかしながら、巴金は、『家』を自伝的小説として読まれることに強い反感を示した。これを機に自ら副題に自伝の名を冠し、「楊嫂」を執筆し、その文末に次のように付記した。全文は以下の通り。

賢しらに振る舞う人たちが私の『激流』を誤って自伝的小説と理解するので、私は自分の自伝を書く決心をした。私はこのようなジャンルの創作を始めるつもりである。読者はこれを読んで分かるように、私は、自分の得意とすること、苦手なことを述べているわけでもなければ、自分がいかに勉強に勤しんだか、どうやって本を写したか、どのようにして何冊かの本を出版したか、どうやってお金を騙し取ったか、それをひけらかそうとしているわけでもなく、なおさら、自分がいかに優秀か、或いは自分がいかに落ちぶれているかを述べているわけでもない。そういったことは、名士や文豪の類がおのずと教えてくれるものであろう。私が書いたのは、こ

れまでの二十数年の人生のなかで目にした、人から踏み躪られ、人から辱めを受けた者の真実の物語である。彼らは、女中、駕籠かき、芝居役者、召使い、乞食など、「高等華人」から蔑まれた人々である。彼らは、日の当たらない場所に住んでいるので、名もないままに生まれ、名もないままに死んでいった。私はいま、この力のないペンで、彼らの墓を照らす日の光をもたらそうと思う。彼らが、私の自伝の主役である。もし、私にもっと気力が漲っていたら、或いは人を踏み躪り、人を侮辱する人の物語をいくつか加えるかもしれない。私のような資産階級（買弁階級ではない）に生まれた文人の物語など、くそくらえだ！ 植字工の時間を費やす価値もない。

自伝は、各篇を一区切りとする。執筆しながら随時発表していくが、発表するメディアは本誌とは限らず、また継続して発表するとも限らない。（一九一一年九月）<sup>11</sup>

半年後、『家』の『時報』連載終了の際、巴金は「後記」（一九三二年五月二二日）のなかで、「多くの人がこれ『家』を私の自伝と見ているが、それは間違いである。作中の出来事は、ほとんどフィクションである」と述べた。巴金はのちにも、

「關於『家』（一九三七年一月）のなかで、「多くの人が『家』

を私の自伝と見ており、なかには手紙を寄越し、私を覚慧と決めつける読者も少なくない。以前にも話したように、「それは間違いである」<sup>12</sup>と述べ、人物や場面設定はフィクションであると語った。

作中人物と作家自身とを区別し、『家』と自伝とを区別する巴金は、決して、社会的な自己の形成や、近代的な自我の確立を描いた『家』から、読者に対する啓蒙という、一九三〇年代の中国の自伝と共通するテーマならびにその成果を排除、否定しようとしたのではない。それよりも巴金は、このような区別をすることで、読者が安易に覚慧の経験を、作家自身の実体験と結びつけて理解したことに反論したのである。換言すれば、覚慧における社会的な自己の形成過程は、読者への啓蒙を意図して書かれたフィクションに過ぎず、実際のところ、本稿第五節でも触れるように、アナキズムに傾倒するなかで形成された巴金の社会的な自己とは、全く異なるものであった。巴金はそれゆえ、『家』は自伝ではないとのスタンスを表明したのでだが、その根底には、覚慧と社会、歴史との緊密な結びつきのなかに、読者が巴金のアイデンティティを見出すことへの拒否があったのではないか。

### 三 「楊嫂」は自伝か？

巴金の『家』と一九三〇年代の中国の自伝は、社会的な自己の形成、近代的な自我の確立を描くことで読者に対して啓蒙を図るといふ共通したテーマを持っていた。しかし、巴金は、自伝の成立に不可欠な作家自身の実体験を『家』のなかに認めようとせず、作中人物と作者との同一化に反論し、『家』を自伝と区別した。こうして書かれたのが、自ら副題に自伝の名を冠した「楊嫂」であるが、この一篇は、社会的な自己の形成をフイクションとして描いた『家』とは違い、作家自身の生活環境、身近な人物に取材し、作家自身の私的で個人的なものを表現した作品であった。

女中の楊嫂は、幼い巴金とその三兄と同じ部屋で生活し、部屋を片づけたり、寝る前にお伽話を聞かせたりと、彼らの世話をしていた。きれいに整えた寝台の上ではしゃぐ二人を叱ったり、二人が庭で拾って来た桑の実と一緒に食べ、酒漬けにするなど、二人にとって母親のような存在であった。ある日、楊嫂は病気にかかり、ほかの部屋に移された。二人は、楊嫂の容態とその暮らしぶりが気になり、彼女を見舞いに行った。ところが楊嫂は、薄暗く、物音一つしない部屋の低い寝台に静かに横たわっていて、茶色いシミのついた薄い布団を掛けられていた。

〔……〕彼女の顔が見えた。顔色は蒼白く、紙のようだった。彼女は体を斜めに横たえ、髪はぼさぼさに乱れ、頭の上に乗っかっていた。目は閉じたままで、くちびるの周りには黄色い痕があった。口は微かに開いて、息をしていた。口だけが、彼女がまだ生きていることを証明した。布団から出ていた片方の手が寝台の縁を掴んでいて、とっくに動かなくなっていた。それは、黄色く痩せ細った手であった。<sup>13)</sup>

二人は、彼らの生活空間とは異質な薄汚れた部屋と、かつての面影をとどめない変わり果てた楊嫂の姿を目にする。幼い巴金は、おぞましいものの正体を勘繰り始める。

〔……〕生き生きとしていた一人の人間がたった数日でこのようなありさまになってしまふなんて、ぼくの幼心にはどうしても理解できなかった。ぼくは、彼女の様子から、むかしの生き生きとした元気な姿を少しも認めることができなかった。彼女が本当に楊嫂なら、ぼくは、それまでのすべては夢に過ぎないと疑ったに違いない。〔……〕<sup>14)</sup>

幼い巴金がもの言わず呆気にとられていると、三兄が楊嫂

に声をかけ、彼女を起こした。そして楊嫂に近況を報告し、腰掛けに置かれていた冷めた煎じ薬を温め直そうとするが、幼い巴金はその間、一言も発することなく、立ち尽くしたまま二人のやり取りを眺めるばかりだった。ところが、楊嫂が寝入ってしまうと、幼い巴金は急に「行こう!」と言って三兄に帰るよう促した。二人は「魔窟から逃げ出すように、急いでそこから立ち去った」<sup>15)</sup>。

一か月ほどすぎると、楊嫂の病状が悪化し、奇声を上げるようになった。邸の召使いたちは、楊嫂の挙動に興味を示し始め、窓紙の隙間越しになかを覗いたが、二人にはそうする勇氣がなかった。ある日、二人は女中の香兒から、楊嫂が服についたシラムミを取って口で噛み潰し、纏足に使う長い布を噛むようになったことを聞かされる。幼い巴金は、「ぼくは見たくない、用事があるから」と言い残し、走り去っていく<sup>16)</sup>。ますます悪化する楊嫂の病氣は医者にも手の施しようがなく、彼女はまもなくして亡くなった。

以上が「楊嫂」の大筋である。巴金は、末尾の付記で予告した通り、虐げられた者の生活を断片的に描いたが、実際、主題化されたのは、「人から踏み躪られ、人から辱めを受けた者」の実態というより、変わり果てた楊嫂の姿を見た幼い巴金に現れた心情変化である。

整理すると第一に、幼い巴金は、きれいな好きで母親のように二人の生活を世話した元氣だった頃の楊嫂と、病氣で瘦せ細り、細かい声で話し、しまいには奇声を上げ病的な挙動を示し、変わり果てた目の前の楊嫂とを、どうにかして同一の存在と認めようとするが、却って両者を対立的に捉え、ついには目の前の楊嫂を突き放してしまった。目の前の楊嫂の姿から彼女のかつての面影を連想できなかった幼い巴金は、全く異なる二つのイメージを、現在と過去という時間によって対立させ、両者の同一化から逃れようとしたのである。

第二に、邸の召使いたちは、楊嫂の挙動を一目見ようと彼女のいる部屋のなかを覗いたのに対し、二人の兄弟は、それを覗くことに極めて消極的であった。幼い巴金に至っては、楊嫂の挙動を覗くことはおろか、それを聞かされることすら拒否した。彼は、家という生活空間を楊嫂と共有しながらも、彼女のいる部屋を薄気味悪い異質な空間と捉え、自身の生活空間と区別し切り離すことによって、変わり果てた楊嫂の姿を突き放したのである。

レイ・チョウは、楊嫂を突き放す幼い巴金の心情変化を「脱親近化」と呼び、「母親代わりの人物の病氣と死から自分自身を遠ざけることによって、彼女の理想化された思い出をもち続ける」<sup>17)</sup>ことができた指摘するが、幼い巴金は、時間と空間

という二つの面から、楊嫂を「理想化」したのである。とはいえ、幼い巴金が楊嫂を「脱親近化」することで、彼女のかつての面影や美しい思い出を「理想化」できるとしても、それによって懐かしさや幸福感が生まれるわけではない。「理想化」の結果はむしろ、楊嫂の現在と過去のイメージを一体化させることへの拒否、或いは変わり果てた楊嫂の姿を目の当たりにしたことへの後悔といった「苦痛」が、幼心に深く刻み込まれていくばかりである。「脱親近化」による楊嫂の「理想化」は、幼い巴金にとってトラウマのはじまりであり、「理想化」を繰り返すなかで、いよいよ拭い去ることが困難なものとなった。

「楊嫂」なる自伝は、末尾の付記にあるように、作者の幼少期の家族生活における実体験に取材した「真実の物語」であり、その意味では確かに自伝である。しかしこの自伝は、読者に対する啓蒙という社会的な役割を意図して書かれたものではなく、作中に登場する幼い巴金も、封建的な旧勢力に反抗し、積極的に社会改革に携わる、覚慧のような社会的な存在ではない。巴金は、そのような関心を排除し、幼い子どもの心情変化を主題化することで、楊嫂の病気に向き合う幼い巴金の生き生きとした心情変化に豊かなイメージを与えることができた。そのイメージの豊かさは、作中に散らばめられたディテールに負うところが大きいと言わなければならない。「楊嫂」の場合、楊嫂の

死という出来事に対する幼い巴金の反応は、語り手が概括、評価するかたちで語られているのではなく、場面（空間）設定、情景描写、登場人物の科白などを通して、出来事の発生から終了に至るまでの全過程をつぶさに辿りながら表現されている。「脱親近化」を繰り返すなかで幼い巴金が負ってしまうトラウマは、このようなディテールを積み重ねていった結果である。

上述したように、謝冰瑩は婚約解消という個人的な体験を女性の解放という社会的な一課題へと発展させ、そこに社会的な自己のアイデンティティを見出した。巴金の場合、例えば楊嫂の死という心情変化を伴う体験を、封建主義への反抗の出発点として、位置づけることもできたはずである。しかし巴金は、この自伝を断片的なかたちのまま終わらせ、そこに社会的な自己へと成長していく道筋をつけることはなかった。自伝作者の持つべきスタンス、自伝の果たすべき役割、自伝の備えるべき内容、いずれの側面においても、「楊嫂」なる自伝は、一九三〇年代の中国の自伝とは対極的な関係にあった。このことは巴金にとって、自伝には社会的な自己を書かない、とのスタンスの表明だったのだろうが<sup>18)</sup>、そのスタンスは、のちに出版された『巴金自伝』にいっそう端的に表れている。

#### 四 『巴金自伝』におけるもう一つの「家」

「楊嫂」が発表されてから、巴金の次なる自伝は長い間書かれなかった<sup>19)</sup>。ところが一九三三年、巴金に自伝執筆の依頼が舞い込んだ。のちに「自伝叢書」として刊行された『巴金自伝』（第一出版社、一九三四年一月）である。自伝執筆の経緯について、巴金は次のように振り返っている。

一 昨々年（一九三三年）、第一出版社が自伝叢書の出版を計画したとき、私に自伝を書くよう持ち掛けてきた。私は、自伝を書くことはできない、断片的な回想しか書けないと返事した。掛け合いに来た友人は、それでもかまわないと言うので、私は「片断的回想」を一冊書き上げ、「出版社に」渡した。原稿はそのまま一年間近く出版社に放っておかれ、一昨年（一九三四年）の年末になって出版されたが、なんと『巴金自伝』に変わっていた。

当時、私は日本にいた。それから半年以上経って、上海に戻ってきたときに、やっと私の所謂自伝を目にすることができた。私はとても不満だった。なぜなら、誤字が多く、販価が高かったし、そのうえ私の原稿より一章分少なく、審査会に削除されたからだ。先日、私は出版社に通知を出し、私の

所謂自伝を発行停止してもらった。<sup>20)</sup>

「自伝を書くことはできない」との言明、回想録が自伝として出版されたことへの不満、自伝発行停止の要求など、いずれも自伝を書くことへの主体的な拒否と見るができるが、そのようなスタンスをもっとも具体的に示したものが、ほかならぬ『巴金自伝』の内容であった。

第一出版社が刊行した「自伝叢書」には、『巴金自伝』のほか、『従文自伝』（同年七月）、『資平自伝』（同年九月）、『盧隱自伝』（同年一〇月）などが含まれていた。いずれも、幼少期からある時期までの体験を時間軸に沿って記述したものである。とりわけ『従文自伝』は、中国の片田舎に生まれ育った少年が、従軍経験を通して社会、歴史との結びつきを強めていくなかで自己を形成する「物語」として書かれている。しかし『巴金自伝』の場合、回想録として書かれただけに、社会的な自己の形成はおろか、「物語」として構成することすら、初めから放棄されていた。『巴金自伝』に収録された四篇を概括しておく、と、「最初の回想」には、小間使いの香兒と遊んだこと、遊び相手の鶏が絞められたこと、女中の楊嫂が病死したこと、読み書きを教える先生が絵を描いてくれたこと、母が蚕を飼ったこと、役人の父親が罪人を裁く場面を見たことを中心に、巴金が幼少期に、父親

が赴任した広元県で体験したことが生き生きと描かれている。

「家庭的環境」には、芝居の一座を邸に呼んだり、家の者たちで劇団を作ったりし、芝居を上演したこと、召使い、駕籠かきと頻繁に付き合ったこと、祖父と父親の死を受けて、仲睦まじい関係にあった親戚同士が互いに腹を探り合い始めたことを中心に、青年期の巴金が成都の邸で送った生活が描かれている。

「做大哥の人」には、長兄の生い立ちから自殺までの生活が伝記的に描かれている。「写作的な生活」には、処女作『滅亡』から『家』に至るまでの一連の作品が、創作の経緯も含めて紹介されている。このような概括からも分かるように、『巴金自伝』は、社会的な自己の形成過程を描き出し、読者に対して啓蒙を図ることで、読者や作家自身を社会、歴史と結びつけようとするスタンスから書かれたものではない。そのようなスタンスから自伝を書く代わりに、巴金は各篇に設けた異なるテーマに沿って、家族生活の実体験そのものに焦点を当てている。とりわけ「最初の回憶」と「家庭的環境」には、身近な人物や様々な出来事に対する彼の関わり方、捉え方、心情の現れ方などが細かく表現されている。『巴金自伝』は、ディテールを積み重ね、心情変化を表現した「楊嫂」のモチーフを受け継いだのである。『巴金自伝』に書かれた実体験のなかには、例えば、封建的な風習や家族制度に固執する祖父が若い世代を死に追いやり、覚

慧のような知識青年が封建主義、家族制度に真正面から反抗する、といったプロットは含まれていない。それは、巴金が意図的にそれを書かなかったからではなく、彼がそのような出来事を実体験として持っていなかったからである。「家庭的環境」を例に見ても、巴金の二人の叔父は日本に留学し、留学中に辮髪を切っており、祖父に至っては、英語を身につけさせようと巴金を青年会(YMCA)に通わせており、実際、開明的な一族であったことが分かる。また、多くの研究者が指摘するように、「歴史のなかの『家』」は「文学のなかの『家』」とは違って封建的、専制的なものではなく、「文学のなかの『家』」に描かれた悲劇や死は、「歴史のなかの『家』」には存在しないフィクションである<sup>20)</sup>。かくして巴金は、『巴金自伝』において、『家』における覚慧の社会的な自己の形成は読者への啓蒙を意図して書かれたフィクションであり、作家の実体験に基づくものではないことを再確認したのであり、『家』は自伝ではないとのスタンスを表明することで、作家自身と覚慧とを同一視し、覚慧と社会、歴史との緊密な結びつきのなかに巴金のアイデンティティを見出そうとする読者の捉え方を再度退けたのである。これまで、自伝と関わりのある三つのテクスト『家』、『楊嫂』、『巴金自伝』を見てきたが、いずれも、巴金自身の社会的な自己、社会的なアイデンティティの問題と関係するものであ

る。巴金は、『家』と『巴金自伝』において、作家自身と覚悟とを同一視する捉え方を拒否するかたちで、彼固有の社会的なアイデンティティが存在することを示唆したが、それがどのようなものであるのかについては言及していない。また、「楊嫂」と『巴金自伝』においては、家族生活の実体験そのものに焦点を当てながらも、登場人物の心情に重きを置いただけで、それを社会的な自己の形成へと展開させていない。巴金における社会的な自己、社会的なアイデンティティとはどのようなものであったか。そして、巴金はなぜそれを書こうとしなかったのか。

## 五 書かれなかった自伝

巴金は、少年時代に五四新文化運動の薫陶を受け、西洋の「社会主義思想」に触れた。なかでも、ロシアの思想家であるビョートル・クロポトキン（一八四二—一九二一）や、ロシア人アナキストのエマ・ゴールドマン（一八六九—一九四〇）らの著作を通して、アナキズムに関心を寄せ、傾倒した。五四新文化運動の前後は、アナキズムが革命思想として中国に紹介されてちょうど十年ほど経過した時期で、中国アナキズム運動がピークを迎えた時期でもあった。こうしたなか、巴金は、アナキズム系雑誌『半月』、『警群』、『平民之声』のメン

バーとして、アナキズムに関する言論活動に携るようになった。ところが、一九二〇年代初頭に台頭し始めた共産主義の勢力に押され、中国アナキズム運動は徐々に衰退していった。

そして一九二五年頃には、中国アナキズム運動の拠点とされたサンディカリズム運動は退潮期を迎えた。サンディカリズム運動によって無政府社会の実現を目指した「社会革命」は、もはや期待できなくなったため、巴金は多くのアナキスト同様、言論活動に専念し、思想の純粋性を守り抜こうとした。国外のアナキストの伝記やその言論を精力的に翻訳、紹介したのもこの時期である。一九二七年から翌年にかけて、巴金はフランスに留学する。言論活動や翻訳、執筆活動の傍ら、エマ・ゴールドマンをはじめとする欧米各地のアナキストと文通し、対面を果たした。その最中、巴金はアメリカで起こったサッコ・ヴァンゼッティ事件を知る。現金強盗犯として濡れ衣を着せられ、逮捕された二人のイタリア人アナキストの無罪釈放を求めて、積極的に救援活動に加わったほか、中国国内のアナキストに支援を呼びかけた<sup>26</sup>。巴金は、この事件に部分的に取材し、処女作『滅亡』を書き上げ、「社会革命」に傾ける情熱を表現し、抑圧、搾取、暴力に満ちた社会を批判した。その直後、『従資本主義到安那其主義』（上海自由書店、一九三〇年七月）を著し、搾取的な社会構造を支える資本主義的経済システムを

根本から改革し、組織化された労働運動によって無政府社会の実現を図る「社会革命」を体系的に理論化した。ほかに、炭鉱労働者に取材し、組織化された労働運動を描いた『雪』（原題は『萌芽』、現代書局、一九三三年八月）を発表している。

以上、巴金におけるアナキストとしての経歴を簡単に振り返った。中国アナキズム運動が退潮期に突入しつつあった一九二〇年代前後に、巴金はアナキストとして出発したが、限られた空間のなかで言論活動などに携わるなか、アナキストとしての自己を形成し、そのような自己を当時の社会、歴史と緊密に結びつけることができた。しかし、中国アナキズム運動は、一九二〇年代中頃に退潮期を迎え、その後、再起が図られることはなかった。一部のアナキストは、一九二七年から一九二九年にかけて上海で刊行されたアナキズム系雑誌『革命週報』に流れ、刊行資金を提供した国民党と結びつくようになった。『革命週報』の創刊当初から、巴金は国民党員へと「転身」したアナキストを批判したが、その一方で、スペインにおけるアナルコ・サンディカリズム系全国組織であるCNTを支持する立場を表明し、中国共産党とも一線を画した<sup>23)</sup>。国共内戦から抗日戦争に向かう時代のなかで、中国アナキズム運動は歴史の傍流に追いやられ、政治の舞台から姿を消した。その結果、巴金はアナキストとして「生きる場所」を奪われ、

当時の社会、歴史との結びつきを断ち切られたのである。

巴金が自伝を書くことを拒否し続けた一因もここにある。読者への啓蒙を意図して、アナキストとしての自己形成を描き出しても、歴史的に見て啓蒙的な意義を持つことはできず、アナキストと社会、歴史との結びつきなど、再確認できるはずもなかった。巴金はそれゆえ、「楊嫂」、『巴金自伝』においてアナキストとしての自己を再構築することを放棄したのだが、一九三〇年代に執筆した『従資本主義到安那其主義』と『雪』に見るように、実現する望みを奪われた「社会革命」を理想化し、アナキストとしてのアイデンティティを持ち続けようとしたことも確かである<sup>24)</sup>。

とはいえ、巴金は、『家』と『巴金自伝』においては、覚悟の社会的な自己の形成をフィクションナルなものと位置づけ、作家と作中人物とを切り離すことで、彼固有の社会的なアイデンティティが存在することを読者に示唆するにとどめた。また、「楊嫂」と『巴金自伝』においては、家族生活の実体験のディテールを積み重ね、人物や出来事に対する主人公の関わり方、捉え方、心情の現れ方に焦点化し、社会的な自己へと成長していく道筋を示すことなく、それを断片的な私たちのまま終わらせた。いずれのテクストにおいても、巴金は、アナキストとしての自己の、文字化による表象を断念したのだが、そうする

代わりに、彼の社会的なアイデンティティを読者の想像に委ねたのである。読者への啓蒙を意図して書かれた一九三〇年代の中国の自伝は、自伝作者における社会的な自己のアイデンティティを揺るがぬものとして読者に明示したが、巴金は反対に、アナキストとしての自己の再構築を放棄し、読者の想像を促

## 註

- (1) フィリップ・ルジュンヌ『フランスの自伝——自伝文学の主題と構造』小倉孝誠訳、法政大学出版社、一九九五年、一〇頁。
- (2) 吉澤誠一郎「歴史叙述としての自伝」、『中国——社会と文化』第一八号、二〇〇三年、二九頁。
- (3) 胡適は『四十自述』（一九三三年）なる自伝を発表した翌年一月、『東方雜誌』（第三一卷第一号）「時賢自伝」欄に「逼上梁山——文学革命的開始」を発表し、五四時期の「文学革命」をめぐる彼の言論を跡づけ、五四新文化運動の立役者としての自己を強調した。同欄に掲載された「我在北京大学的経歴」において、作者の蔡元培は、五四新文化運動の旗手たちを大学に招き、北京大学の教育改革に乗り出す自己の姿を示した。断片的な自伝とはいえ、作者たちは、自伝とは社会的な自己を描くもの、との明確な理解を持っていたことが分かる。
- (4) 一九二七年、謝冰瑩は中国最初の女性兵士として北伐に従軍。

しながら、そのような自己と距離を置こうとした。巴金にとつて、自伝への拒否とは、「社会革命」を理想化し、アナキストとしてのアイデンティティを持ち続けようとしながらも、社会、歴史との結びつきを持ち得ないアナキストとしての自己を客観視する一つの契機を意味したのである。

- 北伐前線の状況を伝えた従軍体験記が高く評価され、新聞掲載を経て、『従軍日記』（春潮書局、一九二九年三月）として出版された。その後、林語堂らの励ましや趙家璧の依頼を受けて、文芸雜誌『人間世』、『宇宙風』に自伝を連載し、のちに『一個女兵的自伝』（上海良友圖書印刷公司、一九三六年七月）を出版した。謝冰瑩の自伝の執筆、連載、出版の諸状況については、陳思広『女兵自伝』是這樣写成的』（『中華読書報』、二〇一三年七月一〇日、一四四頁）に詳しい。
- (5) 朱旭晨「謝冰瑩自伝作品魅力探析」（《荊楚理工學院學報》第二六卷第六期、二〇一一年六月）、一五一—一六頁。
- (6) 『時報』連載（一九三二年四月一八日—一九三三年五月三日、原題は『激流』）後、一九三三年五月、書名を『家』に改め、開明書店から初版出版した。
- (7) 『時報』連載開始の際、巴金は「引言」（一九三一年四月一八

- 日)のなかで、「私がここで読者に見せようとしたものは、過去十数年に渡る生活の一コマである」と述べ、のちにも、「關於『家』(一九三七年一月)のなかで、「私は、ある時代の青年たちの叫び声として、『家』を書いたのだ」と述べた(巴金『短簡』、上海良友圖書印刷公司、一九三七年三月、四二頁)。
- (8) 『中学生』第五一〇号、一九三五年一月一日。李存光編『巴金研究資料匯編(一九二二—一九四九)』(香港文滙出版社、二〇〇一年一月)、六四一—六四二頁。
- (9) 『甬江浪花』第三二期、一九三五年一月一日。同右、六四七頁。
- (10) 巴人『窄門集』(海燕書店、一九四一年五月)。李存光編『巴金研究資料(下卷)』(海峽文芸出版社、一九八五年九月)、五五五—五五六頁。
- (11) 『東方雜誌』第二九卷第一号(商務印書館、一九三二年一月一日)、四六頁。
- (12) 巴金『短簡』、三四頁。
- (13) 『東方雜誌』第二九卷第一号、四三頁。
- (14) 同右、四三頁。
- (15) 同右、四四頁。
- (16) 同右、四五頁。
- (17) レイ・チョウ『女性と中国のモダニティ』田村加代子訳、みずが書房、二〇〇三年、二八四—二八五頁。
- (18) 自身の生い立ちや生活を見ず知らずの読者に「見せる」作者の欲望と、作者のそれを「覗く」読者の欲望との交錯する場が自伝であるとすれば、「楊嫂」は極めて私的で文学的な自伝と言える。「楊嫂」は、家という私的な領域で起こった出来事に取り

材することによって、一方では作者の「見せる」欲望を満たし、もう一方ではそれを「覗く」読者の欲望を満たした。また、邸のなかの人々が楊嫂のいる部屋を覗いたように、「楊嫂」の読者は、作品を通して家という私的な空間の内部で起こった出来事を覗いたのである。

- (19) 辜也平「論巴金の伝記文学創作」(『福建論壇・人文社会科学版』二〇一〇年第二期)、四七頁。
- (20) 巴金「後記」(『憶』、文化生活出版社、一九三六年八月)、一七七頁。
- (21) 劉志栄「文学的『家』と歴史的『家』」(陳思和、李存光編『一股奔騰的激流——巴金研究集刊卷四』、上海三聯書店、二〇〇九年六月、六一—六五頁。巴金の幼少期の生活環境については、周立民『五四之子的世紀之旅——巴金評伝』(秀威資訊科技股份有限公司、二〇一一年五月)、「洗礼」(一九〇四—一九二五年)「第一節「新与旧」も合わせて参考された)。
- (22) サッコ・ヴァンゼッティ事件をめぐる巴金の一連の発言については、拙稿「試論巴金如何関注薩凡事件」(『現代中国文化与文学』第一一輯、巴蜀書社、二〇一二年一月、一九七—二一七頁)を参考されたい。
- (23) 巴金「我的自弁」(『現代』第二卷第五期、現代書局、一九三三年三月)、七〇八頁。
- (24) 過去を理想化し、現在との結びつきを断ち切るスタンスは、幼い巴金が、元氣だった頃の楊嫂を理想化し、変わり果てた目の前の楊嫂を突き放したことで、同じ構造である。巴金は、蘇ることのないやさしく元氣だったころの楊嫂と、実現することのないアナークリストの理想とを重ね合わせていたのではないか。

(こんどう みつお／博士後期課程)